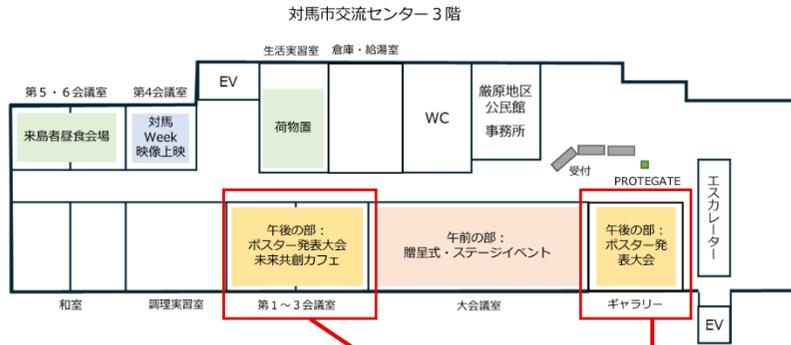


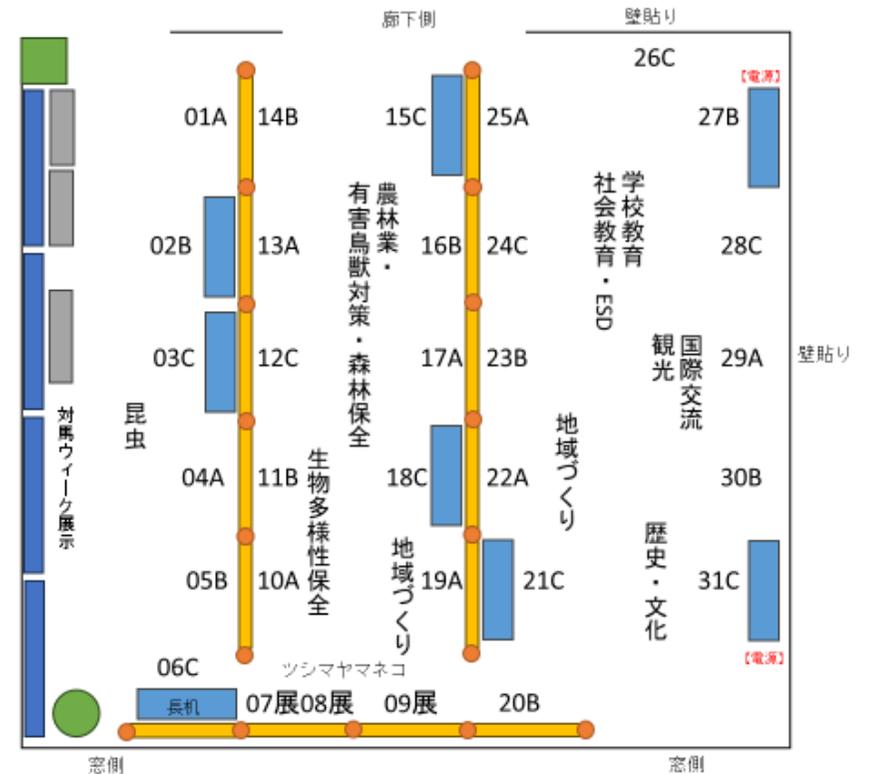
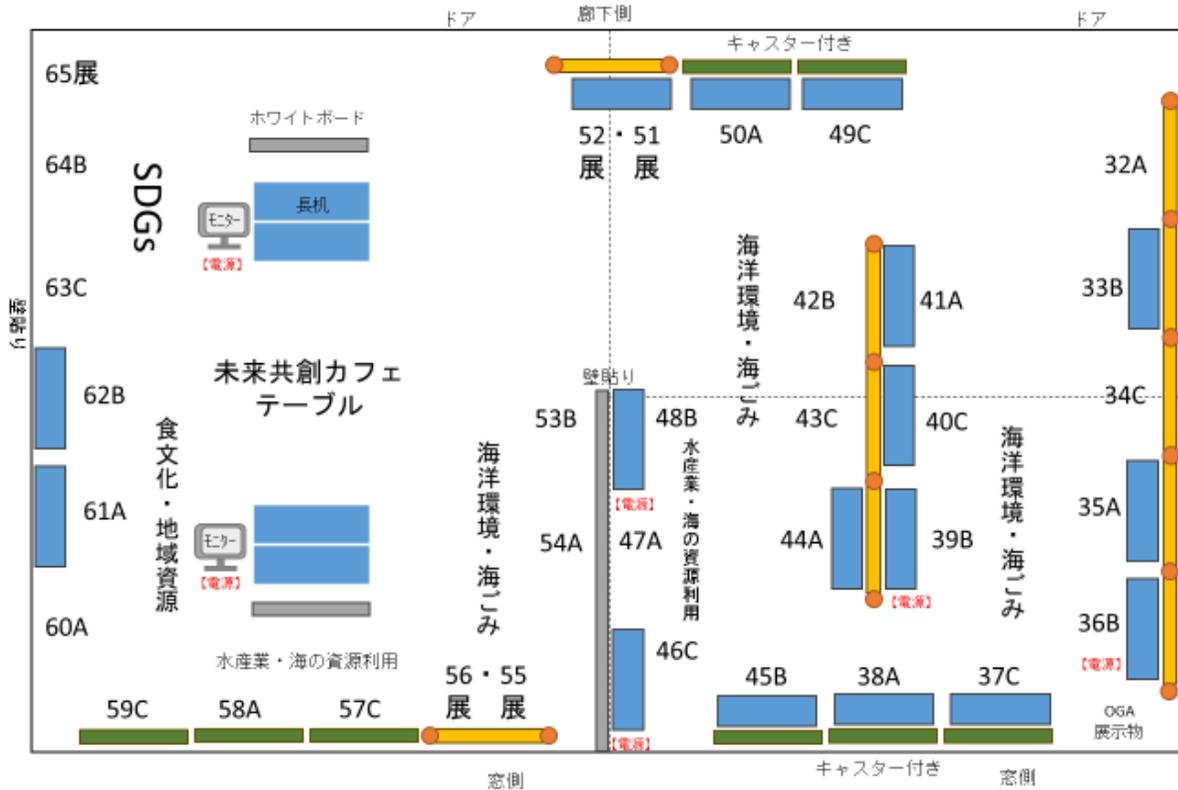
対馬未来フォーラム 2025 ポスター発表一覧



- 発表時間(コアタイム)
 グループ A:【13:00~14:00】
 グループ B:【14:00~15:00】
 グループ C:【15:00~16:00】

第2会場(第1～3会議室)
【発表 No.32～65】

第1会場(展示ホール)
【発表 No.1～No.31】



○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|----|--|--|-------|----------------------|
| 01A | 昆虫 | ウミアメンボってどんな虫？ ～浅茅湾の沿岸生態系の象徴種として～ | ウミアメンボ類は地球上で唯一、海面に生息する「海洋性昆虫」です。主に熱帯・亜熱帯に分布するグループですが、実は対馬の浅茅湾にも 3 種が生息しています。うち 2 種は絶滅危惧種に指定されており保全が急務となっています。本発表では、2024 年までに明らかになった浅茅湾での生息状況や遺伝的独自性について報告します。浅茅湾に息づく小さな生物から、対馬の沿岸生態系への理解と愛着を深めるきっかけとなれば幸いです。 | 朝鍋 遥 | 東京大学大学院 総合文化研究科 |
| 02B | | 対馬産真正水生昆虫目録(仮) | 真正水生昆虫と呼ばれる幼虫期・成虫期を共に水中および水上で生活する昆虫について、生物地理学的に特異な島である対馬における過去の記録の網羅的な調査を実施し、その目録を作成した。このポスターの内容と、今年および来年の 2 年の実地調査から、対馬における水生昆虫の現状を把握し、評価する。 | 濱口 直翔 | 東京都立大学 理学部生命科学科 |
| 03C | | 蛾類から解き明かす対馬の生物多様性 | 対馬は日本と大陸の要素が融合した、独自の生態系を持つ島です。しかし近年、シカ害により植食性昆虫の多様性が脅かされています。私たちは環境指標生物である蛾類に注目し、2 年間の現地調査を行いました。その結果、多くの新種や、韓国固有種と考えられてきた種が発見され、対馬の生物多様性の解明度の低さが明らかになりました。さらに、文献や古い標本の調査から植食者の減少と腐植食者の増加という変化も示唆されました。 | 岡 太陽 | 九州大学大学院 生物資源環境科学府 |
| 04A | | 対馬のニホンミツバチ養蜂者の自然・社会環境の変化に対する反応(仮) | 本研究の目的は、対馬において趣味的にニホンミツバチ養蜂(以下「在来養蜂」と記述)を行う養蜂家が、自然環境及び社会環境の変化にどのように対応し、それが在来養蜂の持続にどのように寄与しているかを明らかにするものである。対馬では古くから養蜂が行われており、特に近年その自然・社会環境は大きく変化している。本研究では、半構造化インタビュー、メンタルマップを用いて、養蜂家の環境認識及び変化への対応を明らかにした。 | 森崎 進士 | 九州大学大学院 地球社会統合科学府 |
| 05B | | 対馬市レッドリストの策定に向けた試案 ～対馬の生物多様性保全の基礎資料として～ | 対馬は生物地理学的にみても特異な生物相を形成しているが、近年の温暖化、シカ等による食害や土壌破壊、里山的環境の荒廃等によって多くの動植物が急激に減少あるいは絶滅危機にさらされている。長崎県では県、長崎市、佐世保市においてレッドリストが作成されているが対馬市は未策定である。レッドリストは生物多様性保全の基礎資料であり SDGs の寄与に繋がる。ここでは「対馬市レッドリスト」の策定方法について考察した。 | 境 良朗 | 対馬の自然と 生き物の会 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|----------|---------|---|---|---------|----------------------------|
| 06C | 昆虫 | ツシマウラボシシジミ観察記録簿 | 今年も何とか絶滅危惧種のツシマウラボシシジミを観察(5/8～10/22)することができました。その観察結果を報告させていただきます。今年の成果としては、卵から羽化までの一連の経過観察データ写真を撮ることができたこと。そして年間の成虫観察できた記録の一覧表を見ることができます。これから成虫に出くわせる時期が概ね判断できるものと思います。観察記録写真・観察記録簿冊子化して展示しております。 | 武田 暢博 | 対馬グローバル大学 しまづくりゼミ |
| 07 展示 | ツシマヤマネコ | 多様な主体が協働する地域 —青海地区におけるツシマヤマネコを守る会の活動からの学び— | 地域づくりの協働では、多様な主体(人や組織)が関わりの度合いに応じて重層的に参加する構造が重要と考えられる。本研究では、NPO 法人ツシマヤマネコを守る会の対馬市峰町青海地区における協働の構造を、関わりの度合いに応じた区分によって整理することを試みた。その結果、同会が核となりつつ、青海地区住民、新規就農者、島内他地区の林業家、全国の支援者などをつなぎ、重層的な協働構造を発展させていることが分かった。 | 北村 健二 | 追手門学院大学 国際学部 |
| 08 展示 | | ツシマヤマネコと共に暮らせる 里山へ～青海の里の再生(仮) | 昨年のテーマ「青海の里の段々畑とツシマヤマネコの住む共生の里づくり」を引き続き継続して活動に取り組む。今年度は環境教育との連携も大きく関わってくることとなり、地元の方々との繋がりを更により良いものにしつつ、ツシマヤマネコの住まう環境を共に創生していく。 | 森田 悦朗 | ツシマヤマネコを守る会 |
| 09 展示 | | 大学生によるツシマヤマネコの 交通事故防止活動 2025 年度 報告(仮) | 2017 年度から大正大学の学生有志が行ってきたツシマヤマネコの交通事故防止活動について、2025 年度の活動報告を行う。併せて、学生たちの対馬での学びの感想をふまえて、活動を通じた学生たちの学びの意義についても考察を行う。 | 本田 裕子 | 大正大学 公共政策学科 |
| 10A | 生物多様性保全 | 対馬に生育する希少な植物の 現状と保全のためのガイドブック 作成 | 対馬にはここでしか見られない希少な植物が多数生育している。しかし、近年のシカ食害や集中豪雨による土砂流出などにより、いくつかの種は絶滅の危機に直面している。そこで、島内におけるこれら希少な植物の自生地や個体数を把握するための調査を行ってきた。今回、それらの情報をまとめ、一般市民に対馬にしかないこれら希少な植物の存在を知ってもらい、今後の保全活動の参考のためのガイドブックの作成を行った。 | 鈴木 浩司 | 富山県立大学 教養教育センター |
| 11B | | 野生動物と人の未来を考える —対馬から日本を考える—(仮) | SDGs 実践塾を経て得た有害鳥獣問題に関する知見を大学内で普及啓発するイベントを開催した。そのイベントでは、対馬で得た意見を共有するとともに、日本全体に視点を広め、さらに議論を重ねた。本ポスター発表では、対馬で得た意見を県外で広め、そこに集まったフィードバックをさらに対馬内で共有する試みである。 | 佐名田 はるな | 福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科 |
| 12C | | 対馬市におけるネイチャーポジティブ推進戦略を考える | 本研究は、生物多様性における新たな国際目標に設定されたネイチャーポジティブ(自然再興)を達成するために対馬市はどのように取り組めばよいのか、現状と課題を明らかにするとともに、住民との対話をふまえた今後の推進に係る政策提言を提示することを目的とし、対馬市の現在の自然環境を健全な自然環境へと回復させるために、対馬独自のネイチャーポジティブ戦略を考察する。 | 大川 康太 | 長崎大学 環境科学部 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|-----------------|---------------------------------|---|--|--------------------------------|
| 13A | 農林業・有害鳥獣対策・森林保全 | 対馬における埋土種子から見た保全すべき森林メッシュ | 森林は、「更新」により生育している植物個体が入り替わることで新陳代謝している。この「更新」に必要なのが土壌中の埋土種子である。しかし埋土種子は、シカ類などの食植生動物により埋土種子から生じた実生が採食されることで消費されてしまう。そこで、ツシマジカが高密度に生息し、埋土種子の減少が懸念される対馬において埋土種子の多様性を調べ、将来保全すべき更新能力を有した森林を選定することを本研究の目的とした。 | 田中 智 | 長崎大学 総合生産科学研究科 |
| 14B | | 対馬における防鹿柵の設置方法の効果の検証—4年目の現状—(仮) | 対馬におけるシカ用防護柵の設置 4 年目の効果を検証結果。市内 10 カ所での動画解析と植生調査の結果、暗幕(遮光ネット)を設置した柵は高さに関わらず有意に高い侵入防止効果を持続していることが明らかになった。柵内では植生の回復傾向が見られた一方、場所による回復差があることや食物被度の長期的調査の必要性があると示唆された。 | 宅間 晴紀 | 東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業開発学科 |
| 15C | | 森であそぼう！！ 親子で原木しいたけ栽培体験で町づくり | 2022年4月から、親子ですいか作りを継続して行う農業体験を継続した。自然と触れ合いながら野菜作りの楽しさやオーナー家族間の交流、地域の活性化、高齢者の生きがいづくりなどを目的に 3 年間の実施を積み上げてきた。2025は、生産物をしいたけに転向して実施した。その為、生産者も発表者からしいたけ生産者になった。対馬の特産品である『原木しいたけ』栽培を、始めて体験する親子ばかりで反響が大きかった。 | 村岡 幸代 | 対馬グローバル大学 しまづくりゼミ修了生 |
| 16B | | 長崎県対馬市における原木シイタケ生産を支える要因と今後(仮) | 生物多様性の損失は近年問題視されているが、生物多様性に悪影響を与える要因の一つとして里山のアンダーユースが指摘されている。原木シイタケ生産に伴うアベマキ等の樹木の利用は現在も継続している里山利用の事例である。本研究では、対馬市峰町の原木シイタケ生産関係者を対象に参与観察と半構造化インタビューを実施し、現在の原木シイタケ生産を支える要因を明らかにした。 | 谷口 智哉 | 九州大学大学院 地球社会統合科学府 |
| 17A | | 合鴨水稲同時作2年目 | 合鴨水稲同時作を2年間実施した結果を報告する。この農法は非常に素晴らしかったので、2年目は家族で耕作している全ての田んぼで実施した。農薬を一切使わずに収穫することができたが、想像を超える大変な苦勞を担うことになった。新たに気づいたこと、新しく挑戦したこと、来年に向けての計画などを報告する。 | 内山 麻子 | 対馬グローバル大学 環境ゼミ修了生 |
| 18C | | 地域づくり | 匿名制チャットを用いた、地域の未来にむけた対話の可能性を探る(仮) | 市民の小さな意見をすくい上げ、よりよい未来を考える場をめざして「対馬の未来を考える会」オープンチャットを運営しています。2023年の核廃棄物処分場誘致の問題をきっかけに立ち上がり、一時は推進派と反対派が激しく対立したりしましたが、最近は落ち着きを取り戻しつつあります。忙しい現役世代も24時間好きな時間に意見がいただける利点と、匿名空間のデメリット。建設的な議論はできるのか。この試みの現状を報告します。 | 須澤 佳子 諸松 瀬里奈 鍵本 妙子 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|-------|--|--|--------|----------------------------|
| 19A | 地域づくり | 既存集落における持続可能な地域づくり手法の提案 | 過疎地域においては少子高齢化により様々な問題に直面している。従来の都市計画モデルでは、取組の持続可能性の課題があった。本研究では住民が「株主」として経営に参加する「住民参画型地域づくり」事業を提案する。この事業モデルの優位性と事業化に向けた課題を検証することで、住民が「生活利便性の向上」と「配当」の双方を享受し住民の持続的な地域関与を促す新たな「自治」の形を提示するものである。 | 江崎 環 | 東京農工大学工学府 産業技術専攻 |
| 20B | | グローバル大学におけるしまづくりゼミの政策効果の検証 | グローバル大学の「しまづくりゼミ」に参加しつつ、『SDGs 未来都市計画』や『アクションプラン』を念頭に、SDGs の推進と地域づくりの連関の観点から、受講生の関心や発想などについて、参与観察、しまづくりゼミの現地実習、参加者への聞き取り調査(遠隔)や設問調査(メールなど)、過去の参加者への聞き取り調査や設問調査を行った結果、しまづくりゼミがどのような効果を与えていたか、またその課題を報告する。 | 田中 陽一朗 | 九州大学法学部 |
| 21C | | 「市民」が考える地域の持続可能性～仁位地区地域づくり計画から | 2025 年度対馬グローバル大学しまづくりゼミを受講し、人口減少、担い手不足に直面する地域の課題解決を「市民」と「公共」目線で考察。「『市民』が考える地域の持続可能性～仁位地区地域づくり計画から」をテーマとし 2015 年に豊玉町仁位地区の住民を中心に策定された「地域づくり計画」を振り返り、地域住民が主体となった地域の持続可能性について研究しています。 | 永田 憲司 | 株式会社十八親和銀行 豊玉支店 |
| 22A | | 対馬市地域づくり計画の現状について | 対馬市では地域ごとに地域マネージャーを置き、地域づくり計画を策定している。まず、ヒアリング調査から形骸化した現状の地域づくり計画に足りないものを分析した。その上で、各地域づくり計画が必要な内容を充足し、本来の目的が達成できる計画になっているかを調査した。その結果、具体的な計画におけるアクターや期間が明確でないものや測定可能な具体性がないために定期的に振り返ることが難しいものが見られた。 | 八幡 昇伍 | 九州大学法学部 |
| 23B | | 「地域づくり計画」の検証 | 平成 28(2016)年策定の「地域づくり計画」の存在を知り、第二次総合計画(2016～2025)の最終年にあたるがこの計画の検証総括の動きがないことに疑問を抱いた。これには何か原因があるだろうと思った。仮説としてこの計画を住民が知らないのでは、周知の方法に問題があるのではと考えて(アンケート(シール投票)・フローチャートを作成して)取り組んだ。 | 武田 暢博 | 対馬グローバル大学 しまづくりゼミ |
| 24C | | 対馬市 SDGs 関連事業が、地域づくりと、その連携の促進に与える影響の検討 | 対馬市の SDGs 研究奨励事業が地域づくりや連携づくりにどのような影響を与えているかを調べている。公開資料をもとに過去の採択研究を分類したところ、ゴール 11 にテーマが集中していることや、地域との関わり方に差があることが分かった。そこで、研究内容を SDGs の目標ごとに整理し、関係者のつながりや人材育成の観点でも分析を進めている。本発表では、制度利用者へのアンケート結果を中心に、中間的な成果を報告する。 | 江藤 由美子 | 福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|---------------|---|---|--|---------------------------------------|
| 25A | 学校教育・ESD・社会教育 | 対馬での学びを振り返る | 過去の対馬学フォーラムでの発表をふまえ、研究方法における課題や、自身の対馬へのかかわり方の変化を整理した。大学一年次のインターンシップをきっかけに来島して以来、対馬のSDGs、地域のお祭り、スクールカウンセリング、SDGs普及の実践など、多様なテーマに取り組んできた。現在は研究上の課題に向き合いながら、これまでの活動を振り返り、今後どのように対馬とかかわっていくかを検討している。 | 江藤 由美子 | 福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科 |
| 26C | | 対馬中圏域から発信する音楽文化活動と地域共生社会の形成をつなぐ連携モデルを考える | 音楽文化活動が地域共生社会の形成に果たす役割を検討し、その過程における共同構造と地域資源活用の特質・課題を考える。対馬島内において課題である市民の移動困難性の解消を目的として発足した『つしまほほえみ会』と、ほほえみ会の移動支援を受けて中圏域 豊玉を拠点として活動する『対馬ユースウインドアンサンブル～Best Smiles～』の立ち上げ、社会福祉協議会の役割、島外の音楽関係者の活動が展開されている。対馬の地域社会の研究を行ってきた研究室が、この動きと出会うなかで、大学が地域に果たせる役割を再考している。そのアクションリサーチの中間報告を行う。 | 瓜生 泰子 田村 めぐみ 永田 春樹 池上 悠斗 清野 聡子 | 九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 生態工学研究室 |
| 27B | | 文化芸術による長崎県離島の子ども達育成支援事業 | 対馬ほほえみ会と吹奏楽と長崎 OMURA 室内合奏団で、対馬において本物の文化芸術に触れる機会が著しく少ない子ども達に対し県内在住のプロ指導者の指導を受ける機会を提供している。参加の課題である移動問題を解決するため、地域の実情に合った子ども達の移動支援を行い、子ども達が都市部と同程度の経済的負担で、自分の興味関心がある分野について指導を受け自己肯定感の向上、人格形成に好影響をもたらすことを目指し活動。 | 松井 旦壽 | 対馬ほほえみ会 |
| 28C | | 対馬の地理的制約を力に変える：「キック AI 教室」導入による新たなスポーツ教育の提案 | 対馬はサッカーチームを台頭に若年スポーツが非常に活発な地域ですが、離島という環境ゆえに、専門的な指導を受けられる機会は限られています。本研究では、コーチの指導傾向を学習したAIがスマホで撮影した動画を即座に分析しアドバイスを返す「キック AI 教室」の対馬における導入可能性と、地域協働の展望を示し、AIがスポーツ教育の地域格差をどのように縮小し得るかを提案します。 | 高橋 璃音 | 東京農工大学工学府 産業技術専攻 |
| 29A | 観光 国際交流 | 「国境の島」対馬におけるサステイナブル・ツーリズム | 現地での関係者へのヒアリング調査や毎年継続的に実施しているアンケート調査を通じて得られた知見をもとに、観光・環境・社会科学・文化交流の視点から、対馬における持続的な観光業の実現に向けた解決策について提言する。 | 鈴木 凱陽 | 早稲田大学高等学院 |
| 30B | 歴史・文化 | 豊玉町千尋藻地区で続く七年祭について | 七年祭は、豊玉町千尋藻地区で七年に一度、地元の山の神「嶽様」を祀る長く受け継がれた儀式である。対馬グローバル大学の現地実習をきっかけに関心を抱き、地区の方々への聞き取りや文献調査、お祭りの研究者への取材を行った。祭りは地区を清め、嶽様の祟りを鎮める役割を担うとされるが、正式な記録がほとんど残されていない点の特徴である。現在、これまでに収集した資料を整理し、今後の調査の方向性を検討している。 | 江藤 由美子 | 福岡女子大学 国際文理学部 国際教養学科 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|----------|---|---|----------------|---|
| 31C | 歴史・文化 | 対馬の縄文・弥生・古墳時代 —黒曜石に魅せられて— | これまで注目されていなかった対馬上島北部で多くの遺構・遺物を発見し、上対馬町のシレンナー遺跡と鬼ガ崎遺跡が遺跡登録された。繊維土器と塞ノ神式土器、黒曜石・安山岩製鏃、石銚、鯨骨などが採集された若宮神社遺跡は、日韓の研究者に注目されている。対馬で見つかる黒曜石の多くは腰岳や佐世保周辺の西北九州と壱岐島産であるが、鬼ガ崎遺跡からは大分県姫島産の黒曜石も見つかっている。 | 長崎 章 長崎 菜々子 | 対馬歴史研究会 |
| 32A | 海洋環境・海ごみ | 対馬の海ゴミをドローンで モニタリング | 本プロジェクトは、令和3年度からドローンによるモニタリング調査の自動化を目指し活動しているものである。今年度は、特に自律飛行システムの開発と、給電設備の開発に注力し、長時間連続飛行の実現を目指す。これにより全自動で広域モニタリングが可能となり、既存のシステムから大幅にコスト削減と調査頻度の大幅向上が可能となる。 | 古野 賢太 | 佐世保工業高等専門学校 |
| 33B | | アップサイクルで ごみゼロアイランドへ | buoy は海洋プラスチックごみ 100%を原材料に特許技術で製品を成形し、回収地と回収者の情報を添えて届けることで、海ごみを「遠い問題」から「誰しもが参加できる問題」へ変える入口をつくってきました。目標は製品の拡大ではなく、海ごみを減らすための仕組みを形にし、関わる人が増えることで海ごみが無くなり buoy が不要になる未来です。対馬では、漂着ごみを資源化し、島内で製品化することで島内循環を実装することを目指します。 | 林 光邦 | buoy 株式会社 |
| 34C | | ダイフクが目指す海洋プラスチックごみ追加流出ゼロに向けた取り組み『北之庄沢モデル』 | ダイフクは、滋賀県のマザー工場周辺に流れる北之庄沢において、河川に漂うプラスチックごみの調査・回収を実施。海洋に流れ込むプラスチックの約6～8割が陸域から発生しているとされるものの、「どこから」「どれくらいの量が」流出しているかの把握ができていない。その課題に対してダイフクは、プラスチックごみの回収・調査・分析を自動化する「北之庄沢モデル」を展開し持続可能かつ有効な解決策へと繋げる。 | 高木 皓平 | 株式会社ダイフク |
| 35A | | 地域から全国へ 対馬から世界へ | 対馬 CAPP は行政と民間をつなぐ中間支援組織です。弊社の活動は海ごみの回収調査・発生抑制・普及啓発です。海岸でごみを拾い、観察し、知り得たものを共有する。これらを対馬ならではの方法を用い、あらゆる立場や文化圏の人たちへ伝える活動を行っています。それを集約した環境スタディツアーでは、海ごみ授業、海岸清掃、浅茅湾シーカヤック体験という内容で、対馬のリアルを包括的に学んでいただきます。 | 関谷 志奈 | (一社)対馬 CAPP |
| 36B | | Ocean Good Art | 対馬の漂着ごみ回収量向上を目的とした対馬市の事業「OceanGoodArt」では、海ごみアート作品の展示による啓発と作品販売による収益を海ごみ回収費用に充当する取り組みを行っています。これまでの取り組みと今後の展望についてご紹介します。 | 久保 伯人 | 対馬市未来環境部 SDGs戦略課 OceanGoodArt 事務局 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|----------|---|--|--|---|
| 37C | 海洋環境・海ごみ | 海洋プラスチックのアップサイクル(仮) | 対馬の海洋プラスチックをアップサイクルしたアクセサリやインテリアの販売実績と、海外での個展や海ゴミを通じた日韓交流イベントなどの開催を行いました。実際の作品の展示や出店実績、海外での個展の実績や日韓交流イベントの詳細などを報告いたします。 | 阿比留 大貴 | AHORA (株式会社 UMIBOWS) |
| 38A | | TSUSHIMA PROJECT FOR SUSTAINABLE ISLAND | 海洋プラ問題にみんなで向き合うきっかけを創ろうと、行政、大学、企業が連携。海の神「おとーしゃ」を助けるため、海洋プラを海岸で拾い、それを再利用した”波絵馬”で願掛けするという物語型のデザインは、万博ブルーオーシャン・ドーム「対馬ウィーク」のコンセプトの柱になり、海の未来への想いを多く集めることができました。本発表では、万博での成果と課題を踏まえ、おとーしゃを通じたきっかけ創りの可能性を追究します。 | 前田 剛 | 対馬市未来環境部 SDGs戦略課 |
| 39B | | 『海はつながっている』 ～対馬での活動報告とコンテンツの更なる活用について～ | 立教大学の映像サークル、「立教大学コンテンツ制作・発信団体 Bilder.」は、対馬市の海洋プラスチックごみ問題を約 4 年間取材し、東京都内で発信してきた。私たちが保有する映像データを活用しながら改めて同問題を紹介し、都市部や大阪・関西万博での発信活動についてご報告させていただく。その上で、対馬市関係者の皆さまと共に、対馬市の情報を積極的に对外発信する方法やコンテンツについて考えていきたい。 | 祢津 遼平 長峰 千拓 | 立教大学 現代心理学部映像身体 学科 |
| 40C | | 対馬の海洋プラスチック問題とその活用 | テラサイクルとサラヤは、対馬の海洋プラスチック問題の解決に向けてそれぞれ取り組みを行ってきましたが、2025 年の大阪・関西万博を契機に両社が協力し、海洋プラスチックを活用した消毒ディスペンサーを開発・設置しました。製造には技術的な課題もありましたが、来場者からは好評を得ました。今後も性能改善やデザイン研究を続け、海洋問題解決を目標に更なる商品展開を目指しています。 | 深澤 恒正 ¹ 吉野 久子 ² | サラヤ株式会社 ¹ TerraCycle Japan 合同会社 ² |
| 41A | | 魚箱の段ボール化に向けた取り組み | レンゴーは、段ボールや軟包装など多様な環境配慮型包装を提供し、資源循環と脱プラスチックという社会課題に取り組んでいます。魚箱では主に発泡スチロールが使われています。軽量・丈夫・高い保冷性といった利点が多くありますが、課題もあります。その課題を解決するために、段ボールでできることを考え、対馬の漁業関係者と共同で包装設計や形態開発を行っています。 | 石井 一志 | レンゴー株式会社 |
| 42B | | 漁業者による持続的な海洋ごみ回収活動に関する環境経済モデルの構築(仮) | 本研究は長崎県対馬市における漁業者による海洋ごみ回収の実態と貢献を明らかにし、さらに 2050 年までの回収事業の持続可能性をシステム・ダイナミクスにより評価した。調査の結果、回収量の 97%を漁業者が担い、高い効率を示した。シミュレーションでは漁業者減少により回収量が大幅に減少することが示され、対策の中では経済的誘引による漁業者数維持が最も有効であると示唆された。 | 中河原 大樹 | 九州大学工学府 資源循環・廃棄物工学 研究室 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|-----|------------|---|--|---|--|
| 43C | 海洋環境・海ごみ | マイクロプラスチック表面に付着した培養可能な微生物の検出 | 海洋ごみ、特にプラスチック片はバイオフィルム形成基盤となり、微生物の付着・拡散を促進する可能性がある。対馬は対馬海流の影響で東アジア沿岸由来のごみが多く、福岡は内湾的で国内排出が中心である。本研究では両地域でマイクロプラスチックを回収し、表面に付着した培養可能な細菌を検出することで、微生物群集の地域差と漂流ごみによる拡散の可能性を明らかにする。 | 室原 一仁 | 九州大学農学部 生物資源環境学科 |
| 44A | | ごみのない対馬を目指して🌈 (仮) | 対馬の自然は観光資源としてとても重要にもかかわらず、地元ではまだまだポイ捨てが残っていて、観光客からもごみの多さに驚かれることがある。一人でも多くの方が「捨てない意識」を持ってくれるよう、私たちは毎月 1 回、虹ののぼりを立ててごみひろいを行っている。昨今、対馬の海ごみには注目が集まるようになりましたが、海ごみになる前の陸のごみ削減・地域の意識向上のためにはどうしたらいいかも一緒に考えていきませんか。 | 須澤 佳子 ^{1,2} 諸松 瀬里奈 ² 鍵本 妙子 ² | (特非)対馬次世代協議会 ¹ 対馬の未来を考える会 ² |
| 45B | | 世界海洋プラスチック プランニングセンター (PLA PLA) | 九州北部は、海流、冬の季節風、狭まった海峡などの自然条件により、海洋ごみが漂着・堆積しやすいエリアで、大量の海洋プラスチックが押し寄せています。佐賀県は、世界的課題である海洋プラスチック問題の解決を目指し、唐津市の波戸岬に世界海洋プラスチックプランニングセンター(PLA PLA)を 2026 年 6 月にオープンします。対馬と同じ問題を抱える九州の自治体として、佐賀県も様々なことに挑戦していきます。 | 井上 俊 | 佐賀県 |
| 46C | 水産業・海の資源利用 | 藻場造成構造物を活用した産学官金連携による持続可能な海洋生態系エコシステムの構築 | 香川大学では 15 年以上連続で天然藻場を上回る海藻を群生させる機能を有した藻場造成構造物の技術を独自に開発した。当該技術を活用した再生藻場がもたらす様々な価値を定量化し、ネイチャーポジティブに取り組む企業等からの資金循環を作り、漁業関係者や関係企業、自治体等、ステークホルダーがあらゆる利益・裨益を享受できる仕組みを確立する。藻場がもたらす豊かなエコシステムの実現に向け、対馬市とも連携したい。 | 永富 太一 ¹ | 香川大学 ¹ 株式会社日本政策投資銀行 復建調査設計株式会社 |
| 47A | | Ocean to Plate 海から消費者に届くまでの魚の情報を追うトレーサビリティの挑戦 | 海の上から食卓に届けられるまでを情報としてトレースすることで、持続可能な漁業を目指しています。世界では標準となりつつある規格があるなかで、日本の特徴である小規模沿岸漁業からくる分業化や豊富な魚種が獲れるが故のトレースの難しさなどを意識しながら、日本でのトレース規格を構築したいと思っています。また、対馬においてはトレースにより消費者に対馬ブランドをお届けするという観点での検討も目指しております。 | 望月 翔太 | アビームコンサルティング 株式会社 |
| 48B | | 藻場増殖礁を核とした対馬市での藻場造成 豊かな森が豊かな海をつくる ヤマネコの住む森づくり | 30年以上対馬の海で取り組んできた藻場造成も、海水温の上昇、海藻を餌とする藻食性魚類の増加といった環境変化により磯焼けが大きな問題となっています。そこでその課題に対応した藻場増殖礁の開発と、さらに一歩踏み込んだ環境負荷低減型の藻場増殖礁の研究開発について発表します。また、「豊かな海は豊かな森から」を合言葉にツシヤマネコの住む森づくりの活動もご紹介します。 | 二川 敏明 ¹ | 住友大阪セメント株式会社 株式会社 SNC ¹ |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|----------|----------|---|--|-------|--|
| 49C | 海洋環境・海しみ | 対馬市×博多大丸 SDGs 包括連携協定 過去～現在～未来 | 2022 年の対馬市との SDGs 包括連携協定に伴う海洋環境問題に対する 2025 年までの啓発活動を振り返る。特に生物多様性をテーマに長崎県立対馬高等学校ユネスコスクール部との共創のクリスマスツリーを中心に紹介しながら、2026 年以降の活動を宣言。 | 箱崎 純史 | 株式会社博多大丸 九州探検隊 |
| 50A | 海洋環境・海しみ | 海ゴミを減らすなら、まずは陸から(仮) | 海ゴミ、陸ゴミを活用したキーホルダーや猪や鹿の革を活用したレザーキーホルダーの商品開発、竹歯ブラシ「Tsubrush」のパッケージデザインを通して、対馬の未来を担う私たちが、どう環境問題に向き合っていくべきかを考えました。ぜひ作品を手にとっていただき、私たちが暮らすこの大切な「対馬」の環境問題について共に考える1つのきっかけにさせていただけると嬉しいです。 | 3年生 | 長崎県立対馬高等学校 商業科 |
| 51 展示 | | ブルーオーシャン・スクール創設に向けた取り組み ～#ThankBlue 豊かな海を次世代につなぐために～ | 次世代の海への関心を深めてもらうため、ビジュアルブック『あおいほしのあおいうみ』を使った探究学習を全国 7 校で実施し、その成果を「#ThankBlue 次世代ブルーオーシャン・サミット」で今年 9 月に発表。次世代に豊かな海を継承するため、全国展開の環境教育と、学校と企業をつなぐ海洋特化型プログラム「ブルーオーシャン・スクール(BOS)」創設を目指し、協力企業・団体・自治体・学校を募集中。 | 木暮 淳子 | 環境教育チーム(★) (代表 フェリックス・パートナーズ株式会社) |
| 52 展示 | | #ThankBlue を体現するグッズ開発「UMI-EMA」 | 海について、北風ではなく太陽のように前向きであたたかなアクションを起こすことをコンセプトに「#ThankBlue ありがとうを、めぐらせよう。」のチームが発足。UMI-EMA は、役目を終えた廃漁具を再生した絵馬。REMARE の再生素材を用い、海の神を祀る住吉大社をパートナーにプロジェクト化。豊かな海を未来に繋げていきたいという想いを込め、お焚き揚げせず、縁起物としてお持ち帰りいただく。 | 土合 和樹 | #Thank Blue を体現するグッズチーム(★) (代表 フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング株式会社) |
| 53B | | 漂流ゴミ回収とアップサイクル | 対馬市の海岸に日々漂着している海洋ゴミを漂着する前に海上巡航と空中からドローンで監視し回収する活動を通して漂着する海洋ゴミと海洋ゴミを回収する労力を削減したいと考えています。回収した海洋ゴミはアップサイクルし利用価値の高い製品としたいと考えています。 | 丸尾 勝俊 | 株式会社 オーシャンパトロール |
| 54A | | 対馬の海洋文化の継承にむけて | 対馬は海洋学的、地理学的、民俗学的に非常に重要な地域である。海洋環境は、生態系の変化、水産資源の減少、海洋ごみ、危機に瀕しているが人口減により「海洋文化」の継承は見過ごされがちである。石積みの藻小屋、和船漕ぎ行事を事例に議論する。緊急的には地域での学校教育や生涯学習での継承が重要と考える。当事者である対馬の方々だけでは解決できない状況にあるが、島外の方々とのつながりで継承への動機が上向き、協力者が増える可能性がある。 | 清野 聡子 | 九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 生態工学研究室 |

★一般社団法人ブルーオーシャン・イニシアチブ

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|----------|------------|-----------------------------------|---|------------|-------------------------------|
| 55 展示 | 海・海洋環境・海ごみ | ヤマハ発動機が挑む『楽しい』ビーチクリーン器具の開発 | ヤマハ発動機では砂浜でのプラスチック片(マイクロプラスチック)を楽しく、効率的に収集が出来る様な器具の開発を行っております。活動を開始して約1年間で試作3号機までの製作を行い、テレビ取材を受けるなど認知を獲得しています。事業化に向けビーチクリーン活動が経済的に成り立つ為のビジネスモデルの検討等も並行して行っております。 | 臼井 優介 | ヤマハ発動機株式会社 |
| 56 展示 | 水産業・海の資源利用 | 子ども達とつくる!!リーフボール海藻牧場プロジェクト | マリンハビタット吉岐では、磯焼けによって荒廃した海を再生するため、子ども達と共に人工基質「リーフボール」を設置し、海藻の回復と生物多様性の向上を図る取り組みを進めています。現地調査やモニタリング、教育プログラムを通じて海洋環境の理解を深め、使われない港の活用や海藻牧場パーク構想など、持続可能な海の再生モデルの構築を目指します。 | 田山 久倫 | (一社)マリンハビタット吉岐 |
| 57C | | 地域資源を活用した藻場再生の取り組み | 対馬で進む磯焼けに対し、地域資源である汚泥堆肥とコーヒー麻袋を使った、低コストで簡単・環境にやさしい藻場再生を提案。専門的な知識や経験がなくても藻場再生に参加できる、誰でも関われる手法が特徴。(有)丸徳水産や(株)クリタス・市民ボランティアと協働し、2025年に取り組みを開始。里山・人・海を循環する継続可能な地域モデルを目指す。対馬未来会議 2024 をきっかけに始まった取り組み。 | 遠藤 京 | オールサム有限会社 |
| 58A | | 島嶼地域における地域主体の生態系保全活動の可視化に向けて | 気候変動の重要な影響の一つは生態系劣化であり、生態系のもたらす多様なサービスを楽しむことができなくなる可能性が高まっている。本研究では、国立公園・国定公園に指定されている島嶼地域を対象として、地域主体の、特に海洋生態系の保全活動の調査を目的とする。今回の報告では、調査対象地域の生態系保全活動の公開データから可視化を試みる。対馬での生態系保全活動の情報を知っておられる方、ぜひ、教えてください。 | 松村 悠子 | 大阪大学 CO デザインセンター |
| 59C | 食文化・地域資源活用 | 食文化としての「せんだんご」にみる空間構成と文化的景観の構築 | 本研究は、対馬における「せんだんご」の生産工程に関連する空間構成を通じて、食文化としての文化的景観の構築を目指す。厳原町阿連地区、厳原町内山地区、豊玉町田地区、上県町女連地区の農家を対象に、サツマイモ栽培からせんだんご生産、流通に至るまでの空間利用の変遷を記録し、地域の歴史・文化と結びついた空間的特徴を明らかにする。これにより、文化的景観としての位置付けを考察する。 | ZHOU YUXIN | 筑波大学 人間総合科学研究科 芸術学プログラム |
| 60A | | 対馬伝統発酵食品「ろくべえ」の速醸における物理特性と色合いについて | 「せんだんご」の製造工程の簡便化、発酵期間の短縮を図るため、 <i>Penicillium oxalicum</i> S-1 株を添加した速醸を行った。また、「ろくべえ」の色調に類似させるため、褐変を促進する高チロシナーゼ活性菌を分離し添加した。これらにより発酵物から作製した「ろくべえ」の物理特性と色調を測定した。 | 垣内 康誠 | 東京農業大学 生命科学部 分子微生物学科 |

○発表時間 A【13:00～14:00】 B【14:00～15:00】 C【15:00～16:00】 ※「展示」:展示のみ ※展示レイアウトは表紙を参照

| No. | 分類 | ポスタータイトル | 発表内容 | 発表代表者 | 所属 |
|----------|------------|--|--|-----------|----------------------|
| 61A | 食文化・地域資源活用 | 青海の段々畑プロジェクト(仮) | 長崎県の段々畑10選にも選ばれた青海の段々畑を復活させ、ヤマネコが暮らす環境づくりを進めます。段々畑の芋掘りも体験させていただき、「自分の故郷のことを大切にしてほしい。」というみのり農園様の想いを届けようと、干し芋のパッケージデザインに取り組みました。ぜひご注目ください。 | 3年生 | 長崎県立対馬高等学校商業科 |
| 62B | | どんぐりで未来を創ろう！(仮) | 未活用資源である「どんぐり」の歴史や対馬との関わりを学び、試行錯誤をしながら商品開発に取り組んだ成果を発表します。作ったコーヒーやクッキー、ガトーショコラはどれも絶品です！より多くの人々に「どんぐり」の魅力を感じていただき、季節の食材の一つとしての復活を目指します。 | 3年生 | 長崎県立対馬高等学校商業科 |
| 63C | SDGs | ユネスコスクール部の活動について(仮) | 対馬の環境保全に関心を持ち、国内希少野生動植物種に指定されたツシマウラボシジミという対馬固有亜種のチョウの保護のため、幼虫の食草を育て、保護区へ植栽をしている。また、海ごみ問題に関連して、対馬市主催の日韓市民ビーチクリーンアップにおいてワークショップの企画運営にも携わった。これらの取り組みを島内外の多くの人に伝え、対馬の現状に関心を持って環境への意識を変えてもらうことが大切だと考えている。 | ユネスコスクール部 | 長崎県立対馬高等学校 |
| 64B | | みんなで見直そう！ SDGs アクションプラン みんなで創ろう！ 対馬オリジナル SDGs No.18 | 対馬市は、SDGs 未来都市としての将来像、方向性、仕組などを示し、すべての人の参加と行動のきっかけとなるよう、「SDGs アクションプラン」を2022年に策定しました。プランは、市民やSDGs パートナーズ、連携大学や企業団体のご意見、社会情勢などを踏まえ、3年ごとに見直すこととしております。将来起こりうるリスクに耐えられるよう、ご意見・アイデア、対馬独自のSDGs18番目の目標案をお寄せください。 | 前田 剛 | 対馬市未来環境部 SDGs 戦略課 |
| 65 展示 | | エシカル消費～海外の事例と対馬 でできる実践の紹介(2025)～ | エシカル消費は環境・人権・社会貢献を考慮した消費行動であり、対馬市でも概念に沿った実践例がある。パラオでは「パラオ誓約」や責任ある観光政策により、住民・観光客が環境配慮行動を日常的に実践している。本研究ではパラオ視察と世界的動向を踏まえ、対馬で可能な参加型環境保全、地域資源保護ガイドライン、循環型経済の推進、教育型ツーリズムの導入を提案。制度化と啓発の両立で持続可能な観光・消費が期待される。 | シュルツ 由美 | Team Tsushima |